上智大学経済学部　同窓会会報　エコノミアン
ECONOMYAN VOL.58
◆発行日／令和2年4月10日　◆発行／経鷺会 千代田区紀尾井町7-1 上智ソフィア会内 ◆編集／広報委員会　編集長 戸川 清(1971経・経)
www.sophiakai.jp/blog/economyan/

上智大学の今、そして個性の発揮

上智大学長　曄道　佳明

経鷺会の皆さま、こんにちは。現在大学長を務めております曄道でございます。日頃より、本学へのご理解と多大なご支援を頂戴し、この場をお借りしまして改めて御礼申し上げます。

すでにお聞き及びの通り、昨年 11 月にはフランシスコ教皇様が本学キャンパスに来てくださいました。ご帰国日のお忙しい中ではありましたが、本学の学生に向けて、また本学に向けての直接的なメッセージを残してくださり感激いたしました。この中で教皇様は、弱き者への寄り添いについて、私たち上智大学がなすべきこと、また若い人達のこのような社会課題への向き合い方について強い期待を表明されました。世界を正しい社会に導く大学としての責務を改めて実感した次第です。本学は、その建学の理念と教育の精神をそれぞれ、「叡智が世界をつなぐ」、「Men and Women for Others, with Others」という言葉で表現し、人の育成を通してその具現化を図ってきました。その理念、精神への想いは、決してぶれることなく、本学の一貫した姿勢であったと思います。教皇様が本学で直接メッセージを残してくださったこの機に、私たちは今一度“上智大学のミッション”について問い返し、教育、研究、社会貢献などの側面から、私たちがなすべきことを再認識したいと思います。

このように本学の社会に向き合う姿勢は一貫したものではありますが、一方で社会の変化、移り変わりは想像以上のスピードで進んでいます。今、私たちは、劇的な社会変化の過渡期にあって、どのようなソフィアンを、どのように育てるのか、といった問題意識を持たざるを得ません。変わらぬ伝統的な教育と、社会の変化を睨んだ新しい教育を、どう併存させ、有機的に結合していくのか・・・これこそが上智大学の教育の個性化につながるものと考えます。

現在本学では、新しい教育体系についての議論を進めています。人生 100 年の時代、少子高齢化の時代、社会のグローバル化の時代、AI が導くデータ駆動型社会の時代、このような現状に鑑みれば、大学は学びの最終機会ではないことは明白です。社会に出てから、人間としての成長をはかり、社会への向き合い方を絶えず問い直し、職務に対する専門性を高め、さらにそのキャリアも一本道ではないこの時代において、まさに大学での学部教育はその基盤を創る機会として十分な機能を有しなくてはなりません。このような考えに基づき、全学共通教育においては、多面的な人間理解、社会リテラシーを軸に据え、海外などでの実践的な経験を豊かにし、変わりゆく社会の展望力を深めるといった視点から体系の練り直しが行われています。

“上智大学の個性”についてさらに触れますと、その大きな特徴は、“グローバルキャンパス×ワンキャンパス”というこの教育・研究環境にあるでしょう。現在は 90 ヶ国からの留学生が集い、また世界に約 370 の協定校を有しています。さらに、全学部が四谷に集結しているという都心の総合大学としては希有の環境も整えています。このように、文化、言語などだけでなく、学術的多様性も確保されるこのキャンパスは、世界的に見ても特徴的な環境であると言えます。この環境下でこそ、現代社会が抱える様々な課題に対して学生、教職員が横断的かつ創造的な議論を交わすことができるのです。この環境を活かした新しい取り組みが、“Sophia Programs for Sustainable Futures”です。経済、経営、新聞、教育、社会、総合グローバルの各学科にこのコースが新設され、それぞれの分野の視点から多角的に社会の持続性を学ぶプログラムです。学生達は、それぞれの学科にてその専門性を身に付けると共に、持続可能社会を学術的多様性の下で議論する共通の科目が配置されます。これも“グローバルキャンパス×ワンキャンパス”の環境だからこそ実現できる上智ならではの取り組みです。

このように、現在本学では、個性化の進展を図り（差別化ともいうかもしれませんが、私は敢えて上智らしさにこだわるという点で個性化という言葉がふさわしいかと思っています）、世界に信頼され、また尊敬される大学を目指して教育、研究、社会貢献の各取り組みを進めています。これらの取組みの多くは、新しい教育へのチャレンジでもあります。経鷺会の皆様におかれては、ぜひ物心両面にわたるご支援を頂ければ幸いに存じます。より深く本学の取組をご理解いただくために、様々な機会においてその説明を果たしてまいりたいと思います。ぜひお声掛けを頂ければとお待ち申し上げます。

グローバル市民

経済学部経済学科長　近藤広紀

「グローバル市民の輩出」…大きく急速に変化していく世の中の情勢をうけ、大学もそのあり方を問われ続けているが、大学の存在意義の根幹、つまり、どんな人材を育て輩出していくのかについての議論を、ざっくりまとめると、こんな感じになるだろうか。

では、この「グローバル市民」とはいったい何か。大雑把に言って、まず、グローバルな舞台で通用するスキルをもった人材、そして、グローバルマインドを備えた人、ということになるだろうか。

このうち、グローバル人材というのは、世界に通用するスキルをもち、その力量を最大限に発揮できる働き方と環境を求めて、世界中を飛び回っていて、したがって、一生涯、ひとつの会社、ひとつの国に、雇用や福祉、福利厚生の面で、お世話になり続けることのないような、自主独立した個人、そんなイメージであろうか。

では、もう一方のグローバルマインドというのは何か。これは、持続可能な世界の実現があってはじめて、自分たちを含む国際社会全体の利益が保証されるわけであるから、それに必要な、人権や、健康、教育、および環境等への責務を認識し、具体的な改善に取り組もうとする姿勢、となるだろうか。

そして、これまでよりも一層意識して、このグローバルマインドの涵養に努めなければ、グローバル人材や、彼らが起業した企業群、または、彼らが雇われているような多国籍企業は、これまで国が果たしてきた役割…物的インフラのみならず、さまざまな制度インフラを提供することで、治安を維持し、自由で公正な経済・社会活動を保障し、教育や医療の質を保ち、健康で文化的な生活を保障するといった役割…を弱体化するかもしれない。

そうなる原因の第一は、彼らが国という枠組みに捕捉されないために、国内政治への関心や責任感が欠如しがちとなる可能性があることによる。国の役割を実体のあるものにするには、おカネつまり税金と、知恵を結集することが必要となってくる。しかし、グローバル人材や企業は少しでも条件の良いところへ動いて行けるために、さしあたり活動拠点となっている国の政治に、無関心かつ非協力的でいようと思えば、比較的そうしていられる。なので、国内政治の立場からすると、おカネも知恵も結集できなくなり、貧弱なプログラムしか提供できなくなってしまう。このことを受けて、国内政治が、グローバル人材に過度に迎合…労働基準その他の規制を骨抜きにすることで、彼らの活動コストを引き下げ利益を出しやすくし、それに課される税も超特価にする…ようになったり、そうかと思えば、過度に冷淡になったりで、国内の政治や経済、社会は、昨今言われているように、「分断」されたものとなって、極端な選択肢の間を行ったり来たりしながら、実質を失いつつあるのではないだろうか。

第二は、グローバル人材や企業群は、そのパワーと性質のため、従来までの個人とも企業とも、国や国際機関とも異なる、新たな形態のアクターとして、国際政治経済の舞台に現れ得るが、かといって、国や国際機関の果たしてきた機能を代替してくれる保証はないばかりか、そのパワーが濫用される懸念がぬぐえないことによる。現在のグローバルな人材や企業の活動のうち、主要かつ重要なものに、情報ネットワークという社会的インフラを提供し、膨大な個人情報を占有し、さらにAIを開発している、ビッグテックやテックジャイアントと呼ばれる企業群がある。こうした資源は、経済学の用語でいうなら、公共財やクラブ財に近く、その事業体は、独占や寡占などの市場形態のなかで活動している。こうした場合、戦略性および公益性の観点から、その活動は従来から国の支援や統制の対象とされてきた。しかし、現在のこれら事業体の活動は、単に範囲が広いというだけではなく、その実体が目に見え手に取れるようなものではないため、特定の国に管理される、あるいは国家間の協定のもとに管理されることが不可能となっている。

たしかに、彼らは基本的に民間人であり民間企業なので、自分の利益や株主利益の最大化が目標となる。国が提供するプログラムの便益は、自主独立の自分たちには比較的無縁である一方で、税負担は利益に応じて求められるなら、彼らにとっては

何ら得るところがないように感じられるのであろうか。

しかし、それは大きな間違いである。彼らこそ、自由で公正な経済活動を保障する法体系、教育、治安や平和、さらには世界を持続可能にする環境や健康、貧困対策などから、多大な恩恵を受けているはずであり、そして、これらは国や、完全ではないにしろ複数の国々の外交努力によって提供されてきた、多種多様な制度インフラによって支えられてきたのである。

しかし、希望の持てる動きも現れている。アメリカの主要企業が構成する財界団体「ビジネスラウンドテーブル」は、2019年夏に、顧客やサプライヤー、従業員などのステークホルダーと、それを支えるコミュニティーを相手に説明責任を果たしていくとの声明を発表し、株主利益最大化という従来の方針からの大転換を打ち出した。

こうした方向は、先述のように企業の利益と究極的には矛盾しないとしても、個別の民間企業にそうした説明責任がどのように担保されるのかについては不明であり、また、そうした目的の名のもとに、結局は、コミュニティーの利益を差し置いて、私服を肥やすだけではないかという指摘も古くからある。

国とも企業とも異なる、新たなアクターの出現に際し、その性質とそこから演繹されるガバナンスや説明責任のあり方は、経済学のみならず政治学や国際関係論などの社会科学共通の挑戦しがいのある研究テーマとなる。

物事が高度に専門的かつ急速に展開する状況のもとで、持続可能性を保障し、コミュニティーのメンバー皆が利益を得られるようなアイデアは、潜在的にまだまだ未発掘であろうから、政治が限定された人たちの利益を国益であるかのように喧伝しているような状況下で、新たなパワーと知恵を集約させている事業体の当事者たちが、こうした問題提起をオープンな形で行ったことは希望が持てよう。

冒頭の話に戻ると、大学はどうか。上智大学でも2020年度秋から、Sophia Program for Sustainable Futures（SPSF）という英語による学位取得プログラムがスタートする。そこでともにグローバルマインドを涵養し、そうして輩出される「グローバル市民」たちとともに、持続可能な社会への貢献ができればと希望する。

「縄文道経営」―― 縄文道と新縄文人の見地から

加藤春一（1968年 経・経）

AI、ロボット、更に5Gの時代に突入し、これからの人々はどの様に生きていくべきかという大命題に、簡潔なメッセージを提示してくれた、現代の世界的頭脳がいる。約2,000万部という今世紀世界最大のベストセラー「ホモ・サピエンス」「ホモ・デウス」の著者ユバル・ノア・ハラリ博士（イスラエル ヘブライ大学教授）である。博士は科学技術の驚異的な発展で人間にとってもっとも大事な5感を失っているという。回復するには狩猟時代の人間の生き方（我が国ではまさに縄文人）を学ぶべきと主張し、そうすれば新たな時代への環境適応力が出来、生き延びることが可能と提言している。

縄文道はまさに、日本が世界に誇る約13,000年続いた縄文文化の縄文人の生き方を現代に仮説設定した道である。哲学者 梅原猛先生は日本人の源流で基層であることを明言。世界的地理学者 ジヤレッド・ダイアモンド博士は縄文文化は世界に誇りうる文化的偉業と述べている。2018年1月特許庁商標登録認可済みの縄文道とは以下の通りである。

普遍の道―自然との共生、平和の道、母性の道、富の公平、これらは国連のSDGsの精神と一致する。

大和の道―科学技術―匠の道、日本的美意識、武士道の源流が縄文道（紀元前660年の神武天皇以前の道）と武士道（紀元後660年以降の新渡戸稲造博士が唱えた日本人の道徳体系）

超グローバル時代とデジタル社会とに直面した日本人が生き残るには、縄文道と武士道の精神性を有して、新たな時代に相応しい8つのスキル・ナレッジを備えた新縄文人が輩出されることを期

待して「新縄文人」と命名した。－（現在特許庁に申請済み）

1. COURAGE（現状打破への勇気）
2. COMMON SENSE（逞しい常識）
3. COMMONLY USEFUL SKILL&KNOWLEDGE（世界で共通する技能と知識）
4. COMPETENT（成果を出しうる能力）
5. COMMUNICATION SKILL（伝達能力）
6. COMPLIANCE（法令遵法精神）
7. COOPERATIVE MIND（協働精神）
8. CULTURALLY BARRIER FREE（異種文化との壁を破れる）

新縄文人は現代日本が直面している会社の経営を変革する課題を担っている。

日本の会社社会を取り巻く環境は：1. インターネット化　2. 超グローバル化　3. 超速なイノベイションの３つである。これらの動きに対応するためには従来の組織と人材では対応出来ない。

解決のヒントはまさに縄文人の狩猟民族スピリットである。縄文人は厳しい自然環境の中で、1. リスクテイカー　2. チヤレンジャー　3. イノベイターであった。現代日本人は東京大学の斉藤成也教授が指摘するように 12－20% の縄文人 DNA を有している。これは今まさに求められているベンチヤースピリットである。

「縄文道経営」は組織論からは　限りなく

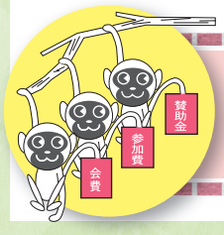
1. OPEN（透明性を徹底的に高める）
2. FLAT（縦会社構造を徹底的に FLAT にする）
3. SIMPLE（AI　ロボット　デジタル　ツール使用を最大化しつつ単純化、簡潔化）

にする必要がある。経営者は革命的決断が迫られている。「経営人財論」からは経営者も管理者も弥生型から縄文型へ意識と行動の変革が必要だ。以下８つのポイントを列挙する。

弥生型（今迄の肥大した日本型官僚思考）		縄文型（真の 21 世紀型経営思考）
管理型（BEAUCRATIC）	―――	動態的（DYNAMIC）
年功型（SENIORITY）	―――	成果型（RESULT）
垂直型（VERTICAL）	―――	水平型（HORIZONTAL）
就社型（COMPANY）	―――	就職型（INDIVIDUAL）
固定型（EMPLOYED）	―――	変動型（CONTRACTED）
規律型（FORMAL）	―――	自由型（FLEXIBLE）
効率志向（EFFICIENCY）	―――	効果志向（EFFECTIVE）
適格性（QUALIFICATION）	―――	適切性（SUITABILITY）

以上の通り「縄文道経営」は思考と行動特性で、冒頭のユバル・ノアハラリ博士が述べた狩猟民族特性の縄文人的５感を磨き、６感を大事にして直感力も養い、自立した個人を啓育することだ。弊社と協力関係にある日本一の人財育成実績を誇るグループダイナミックス研究所 柳平彬代表と、元文部大臣 下村博文氏に以下提言した。「明治時代以来の上から下への教育の時代は終焉し、今後は個人が心の底から学ぶ啓育の時代へ突入したので、行政を含めて啓育に言葉を改めるべきだ。」この提言を受けて下村氏は「啓育立国　日本」を最近上梓した。日本はまさに「縄文道経営」の啓育の時代に入ったとの認識だ。

（一般社団法人縄文道研究所　代表理事）



－年会費納入のお願い－

同封の「払込票」にて年会費 3,000 円の払込をお願い致します。あわせて、寄付金によるご支援・ご協力をお願い申し上げます。

「女子部会」順調に３年目を迎えます

福田順子（1968 年 経・経）

平成 29 年（2017 年）の経鷲会総会で承認され、翌 30 年から活動をスタートさせた「女子部会」も、令和 2 年で 3 年目を迎えます。部会員も現在、20 名（うち 1 名は学部 2 年生（準会員））になり、地味ながら経鷲会に貢献すべく、愚直に活動を続けています。

主な活動は、隔月開催の「定例会議」、年 2 回の「勉強会」、年 1 回の ASF（All Sophian's Festival）でのイベント実施、の三大行事ですが、その間に在学生との交流なども行いながら、小さく堅実に活動してきました。経鷲会の皆様や関係者のご協力、さらには経済学部やソフィア会事務局のご支援をいただき、これまでのところ、大きな失敗もなく、年とともに、「経鷲会女子部会」の名前が徐々に認知されるようになってきました。

これまでの活動を振り返り、これからの活動の一層の活力になるよう、会員の皆様にご報告することにしました。

◆ ASF での「親子で楽しむパソコン解体体験」

このイベントは、女子部会発足の前の年からスタートしました。たまたま私が前職の大学で地域の子供たちに実施してきたパソコン解体体験教室の経験を生かすことができ、解体道具も揃っていたので無理なく実施することができました。ただし、少人数で実施するのは不可能ですので、経鷲会の役員や、教え子たちの支援をいただきました。メインストリートに大型テントを張って、テーブルを 10 台、解体用の中古パソコンや解体道具、解体後のごみや残渣を入れる段ボールなどを用意して、参加者を待ちました。

ASF の広報誌には間に合わなかったので、どれくらいの人数が集まってくれるか、とくに小さな子供たちがどのくらい参加してくれるか、半分はドキドキの当日でした。宣伝しなかったにもかかわらず、何と 100 名近くの親子が、パソコン解体に挑戦してくれて、怪我もなく、16 名収容のテーブルが何回転もする結果となりました。定員オーバーであきらめてもらった子供たちもいましたが、彼らは次の年は、スタート時刻の前に来て、準備ができる前から待っていてくれました。

私は 10 年あまりの経験から、子供たちは上手に解体できるということは理解していましたが、初めてこのイベントをお手伝いいただいた方たちの中には、果たして子供にパソコンが解体できるか、怪我はないか、とご心配の向きもありました。それらはすべて杞憂でした。小さな手袋をしてドライバーや解体道具を手にした途端に、子供たちはいきいきと手を動かし、せっせと解体を進めました。解体を始める前に、「ネジを探してね。それを外すと上手に解体できるよ」と、きっかけの言葉をかけるだけで、ほとんど自分たちで解体していきました。

解体後は。材料の分別をして、段ボールまで運び、再利用できることを理解するまでが子供たちのお仕事、ということにしましたので、しっかり環境教育と環境経済を実践できたと思います。小学校でも「3R」については学んでいますので、知識だけで

パソコン解体に挑戦

ASF「パソコン解体体験」スタッフ

なく実践ができたことで、少し成長し自信を持ったように思ったのは身びいきだったでしょうか。

年々、参加者が増え、毎年100名を超える親子が参加してくれました。最年少は2歳10か月の男の子でした。手つきがよくて驚くほど上手に解体していきました。残念ながら、諸般の理由によりこのイベントは昨年、最終回となりましたが、卒業生、先生たち、在学生からも、「パソコン解体体験」を認知いただけるようになりました。今年のASFに、期待して来学する子供たちがいたら、申し訳ないと思っています。女子部会にとっても記憶に残るイベントでした。今年のASFでは何をするかを、会議で検討していますが、「パソコン解体体験」を超えるアイディアが出ずに、生みの苦しみを味わっています。

◆テーマと講師に恵まれた「勉強会」

年2回の勉強会も、少しずつ参加者も増え、定着しつつあります。これまでの4回は、テーマと講師が魅力的だとの評価をいただいています。（アンケート調査による）

第1回は、スウェーデン在住のトゥンマン武井典子先生（専門は児童文学）に「福祉国家スウェーデンの光と影」というテーマでお話いただきました。テーマは「光と影」だったのですが、影のお話はほとんどなく、この国の福祉制度は本物だということが理解できました。国民は退職後、一月3万円あれば生活できるという話、日本と違っていじめや子供の自殺のニュースはない、という話には考えさせられました。福祉制度だけでなく教育制度にも光るものがあるのでしょう。

第２回講師　トゥンマン武井典子先生

第2回は、「環境を仕事に」というテーマで、女性起業家でもある（株）東京油田力の染谷ゆみ社長にお話いただきました。廃食油を電力に変えるという仕事を起業し、東京電力に対抗することを目標に、居住区の墨田区で徐々に定着し認知されている女性社長です。東北大震災の時には、自ら油田力を車で運び、寺に避難した子供たちの暖房に役立てた、という話は感動的でした。環境をビジネス化するのは難しいと思っていましたが、大企業では難しい細やかでニッチな環境ビジネスがあること、これからの成長性をあらためて知ることができました。

第２回講師　㈱東京油田力　染谷ゆみ社長

第3回は、「江戸小紋に挑戦」というテーマで、墨田区で伝統工芸師として江戸小紋の染工場を経営されている中條隆一ご一家と社員の方たちにご指導いただき、体験型の勉強会となりました。簡単だと思っていた「糊付け」の工程が、これほど難しいということを身をもって思い知らされました。糊付けで一人前になるには10年かかると聞き、伝統工芸を守ることの大変さと重要性を理解しました。また、「染め」の工程では、A4版ほどに描かれた模様を、1反（112cm × 46m）の布の上を、1ミリのずれもなく移動させながら染めていく工程には、声もなく、ただただ感心するだけでした。参加者は、伝統工芸師の手ほどきをうけながら、

第３回講師　中條隆一先生

お手伝いいただいて、江戸小紋のテーブルセンターを制作しました。最後の工程（乾燥）は専門家にお願いし、全員、それなりに満足いただける出来になりました。

第４回は、イギリスで「Top Tea Place」という称号を授与された宮脇樹里さん（三越本店で Juri's Tea Rooms 開業）に、紅茶の国イギリスで開業し、最高の称号を受けるにいたった経緯や難しさの克服、そして楽しさなどを伺いました。コッツウォルズという歴史のある町で、日本人がティールームを経営するのは非常に大変だったと思いますが、爽やかなお人柄と日本人らしいきめ細やかさで地元の方たちに愛されるティールームであったことを、さりげない話にまとめていただきました。お父様が上智大学経済学部の卒業生であったことで、ご縁ができて嬉しい、という感想を樹里さんからいただきました。会場が１号館４階で、100 年の歴史ある建物、しかもエレベーターもない条件でしたが、事前に事情を説明していたこともあり、クレームもなくほっとしました。しかしコッツウォルズのティールームは 350 年の歴史をもった建物であったという話に、100 年ではまだまだと思い知らされました。

第４回講師　宮脇巌さん、樹里さん親子

今年の春の第５回は、5000 円札のモデルに選ばれた「津田梅子女史」をテーマに勉強会を開催する計画でしたが、新型コロナの影響で、秋に延期することになりました。講師は、津田梅子さんをテーマに博士論文を作成し、博士号を取得された研究者の木藤まどかさん（写真）にお願いしました。10 月開催を予定しています。

第５回講師予定　木藤まどか先生

◆これからの女子部会 ～在学生との交流で長寿の組織を～

スタートしてまだ２年しか経っていませんが、サボることもなく勉強会やイベントを愚直に実践してきました。少しずつですが実績を積み重ねることで実力もつき、外部からも一定の評価をいただくまでに成長しました。とはいえ、少ない人数で予算もない中での実践ですので、大きな企画を実施するには至っていません。しかし経済学部出身ですのでハーバート・A・サイモン先生がおっしゃった「限定された合理性」を心に止めながら、できる範囲でできることを一つずつ丁寧に、やっていこうと考えています。

経鶯会同様、女子部会も会員が高齢化しつつあります。まずは、組織が継続できるよう、若手の参加を推進することを目指します。そのためにも、在学生との交流は必須ですし、奨学金の授与者に働きかけたり、ゼミナールの先生方のご協力を得て、若手の充実、組織の強化に努めていきたいと思います。

在学生はシニアの持っていない新鮮な発想と行動力がありますので、これからは在学生（女子に限定せず）との共同作業や交流事業に工夫を凝らしたいところです。読者の皆様のお知恵を拝借いたしたく。jfukuda1308@ybb.ne.jp（福田のアドレス）までご一報いただきたく。あらゆる情報をお待ちしています。

以前、「エコノミアン」で書きました「女性起業家塾」のような経済学部ならではの企画も、いずれ実現する日を夢見ています。

皆様の、正面・側面からのご協力・ご支援をお待ちいたします。

趣味と仕事の両立

小野塚惠美（1997 年 比較文化学部）

母の友人から「趣味と仕事の両立」という題でエッセイを、というお話を頂き、正直その課題に沿った興味深い文章が書けるのかと不安になった。私は比較文化学部卒業で、英語で教育を受け、日本語の文章に自信がないのと、そう他人に誇れる趣味がある訳でもないから。唯一言えるのは、若い頃から周りの助言は素直に聞いた方なので、最近の週末の趣味はその成果だと言えるかもしれない。

私は大学卒業以来、外資系の金融機関でかなりのファストペースで働いてきた。その間に二度の転職と三度の出産、経営方針の転換やリーマンショックなどによるリストラ危機や配置換えに伴うヒヤリハットは片手では収まらない。40 歳を過ぎたある時、体調を崩しがちだった私に、夫から「まずは体を整えてみたら？人間誰でも走れるから、マラソンやってみたら？」と勧められた。体育といえば小学校以来避けてきたことの一つで、当時の私にしてみれば、走る、しかも目的もなく何十分も何時間も走るなんて、ありえないと思っていた。ところが、2015 年 3 月「表参道ウィメンズラン」という 10km マラソンに、ほぼ強制的にエントリーさせられてしまった。緊張感による胸の鼓動を感じながらも、家族による声援を受けて何とか完走できたあの爽快感は今でも忘れない。その時、人間は誰でも走れるようにできてると実感し、ちょっと不安になるくらい高めの目標を仕事以外でも作ってみよう、と思った。それ以来、夫とは毎年軽井沢ハーフマラソンに出場している。決して早くは走れないけれど、21km をある程度の準備で走りきる体力を維持しようという夫婦の健康目標は達成している。

もう一つは母からの助言である。社会人 20 年を超えたころ、会社ではアジア・パシフィックの COO という大役を仰せつかり、朝はオーストラリアから夜はニュー ヨーク時間まで、めいっぱい働く私を見て、「あなた、仕事と家庭以外にも趣味を持たないと続かないわよ。だって人生は長いんですもの。」と諭された。後にこれが、両親や家族に家事・育児協力要請という形で跳ね返ってくることも予期せぬまま、私のウェルビーイングを心配しての一言だった。それもそうだ。私は社会人になってから、平日は殆どスーツとパジャマ以外は着ない生活で、あっという間に 40 歳を過ぎていたのだから。その言葉に背中を押され、私は中・高校生時代に習っていた声楽を再開した。今では毎年発表会でオペラのアリアやイタリア歌曲を歌っている。

2016 年後半から、仕事ではアベノミクス第三の矢である成長戦略のなかで推進されている ESG 投資* に関わってきた。財務リターンを追求する投資家にとって、非財務情報である ESG を投資に盛り込むということを理解し、体現するのはとてもハードルが高く、社内では私自身が先駆者的な立場になってしまったため、必然的に社外に師を求めていた。そんな時、「業界のガバナンスの権威が、銀座でバンド演奏を定期的に披露している」という情報を入手し、「ボサノミクス」というボサノバ を中心に活動しているグループに出会い、めでたくリードボーカルに抜擢され、歌手小野塚惠美としてデビューした。同時にバンドメンバーとも ESG について意見を交わすこともでき「ESG のプロ」として、音楽活動も仕事も着実に展開中である（よろしけ ればググってみてください）。この歌の趣味によって、母校である上智大学との貴重なご縁も頂いた。2019 年 3 月に上智大学とフィリピンのアテネオ大学の交換留学プログラム 50 周年記念行事が企画されていた。その企画メンバーだった母（仏文 72 年卒）は、「うちの子のバンド、余興で来てもらう？」と提案し、四ツ谷キャンパ スでの 100 人規模の祝賀会で「ボサノミクス」のステージを楽しんでいただいた。

そんなことで、私はフルタイム金融ウーマン、ワーキングマザー＆パートタイム妻とランナー兼歌手としてなんとかワークライフバランスを保っている。100年人生が現実となった今、リンダ・グラットン教授の言葉を借りれば、私にとって趣味は、スキルアップする「生産性資産」につながり、そこで出会う方々や費やすエネルギー全てが私の「活力資産」となっている。そしてこれは、いつまでも好奇心や挑戦し続ける前向きさを忘れない「変身資産」となり、生涯心身供に健やかに暮らしていくことに大いに貢献していると感じる。

（カタリスト投資顧問㈱取締役副社長 COO）

* ESG投資とは、企業の持続的な成長は環境（Environment）、社会（Social）、企業統治（ガバナンス）（Governance）への適切な対応を持って可能であり、それを投資家は監視、促進するという投資のこと。学校法人上智学院の投資ガイドラインにもESG投資が組み込まれている。

経鷲会奨学生からの礼状

大谷祥太郎（経・経 3年）

この度は経鷲会奨学生に選んでいただき、誠にありがとうございます。入学してからの日々の勉強の成果が認められ大変うれしく思います。この賞を受賞できたのも、経鷲会の皆様や授業を担当してくださった教授の方々、先輩や友人の支えがあってこそです。これからもどうぞよろしくお願い申し上げます。

私には今後の目標が二つあります。一つ目はより一層のゼミ活動への注力です。入学してから二年間、経済学を全力で学び続けてきました。しかし、その中で世の中の仕組みを法則やメカニズムに沿って理解することの面白さを感じると同時に、実際の生活ではどう活かせるのかという疑問が生まれていました。そこで三年生から始まるゼミ活動では、経済学を用いながら実際に企業と協力しその企業の課題を解決することを目標に、川西ゼミに入りました。

一年目である2019年度は調布市の個人書店の活性化に取り組みました。その中で、仮説建てや分析、根拠づけにゲーム理論や行動経済学を活かすことができました。しかし、それまで売り上げや需要などの定量的なことを分析する理論ばかりに目を向けていたため、会社の大小に関わらず同じ尺度で物事をとらえてしまい、社長様個人の想いに寄り添うことが十分にできず、行った施策も没個性なものとなってしまいました。そこで二年目である2020年度は、人々の想いや地域の特徴を取り込んだ理論構築を目指していきます。

二つ目の目標は部活動です。現在、体育会アーチェリー部に所属しております。所属したきっかけはフレッシュマンウィーク期間に行われていた射的体験でした。初心者に対して優しいだけでなく、弓を打つ事の楽しさを喜々として語っていたのを今でも覚えています。そのような先輩方とふれあい、雰囲気と人柄に惚れて入部を決意しました。もちろん入部してからはいいことばかりではありませんでした。特に最初の数か月は矢を射ることができず、型をしみこませるための素引きばかりでモチベーションが下がることもありました。しかし、先輩の「ただ何も考えず行動するのではなく、今やっていることが何のためになっているか考えながら行動することが大切」という言葉を受け、モチベーションを保ち続けることができました。この言葉は部活動だけでなく、普段の授業におけるモチベーションの向上にもつながり、自分の基礎を形作っています。

これまで頑張ってきた部活動も今年の五月で引退します。集大成として三月の最終週から始まるリーグ戦に向けて、勉学・就活と両立させながら一層全力で注力しチームに貢献していきたいです。またアーチェリーの楽しさを伝え続けていき、自分が受けたように下級生の考え方自体を変えられるような指導を目指していきたいと考えています。現役生としての部活動は五月で終わりですが、OBとして部に指導しに行くことはできます。そのため引退後も部活動にかかわり、アーチェリー部の発展に微力を注ぎたいと思っています。

現在単位をほぼ取り終わり、部活の引退も近いため就活が当面直面する課題です。その就活が終わった後はただ遊ぶのではなく、AIの発展やグローバル化など変化の激しい将来を見越し、大学在学中だけでなく社会に出てからも上智大学生の誇りをもって日々勉強することで自己研鑽し乗り切っていきたいです。また、ゼミや部活動で得た仲間との関係を通し、大学との関係性も大切にしていきたいです。

経鷲会の皆様には、今後ともご指導・ご鞭撻を賜わりたく、どうぞよろしくお願い申し上げます。

武漢支援募金へのお礼

武漢支援募金へのご協力に深く感謝申し上げます

昨年12月に中国湖北省武漢市で新型コロナウイルスCOVID-19による肺炎の発生が報告されて以降、現在は中国のみならず欧州を中心に世界各地に感染者が拡大する深刻な事態となっております。

本年1月に上智大学中国留学生会と上智大学中国人留学生同窓会である「華鷲会」は、「ソフィア武漢支援委員会」を立ち上げ、上智大学と上智大学ソフィア会のご支援のもとに募金活動を行って参りました。すでに皆様のご厚意により頂戴した募金は、中国武漢大学人民病院でのマスクや防護服など医療物資の購入に活用させていただいております。

これまでの上智大学経済学部同窓会「経鷲会」はじめ関係者皆様のご厚情に、心から深く感謝申し上げます。一日も早く、COVID-19の感染拡大が収まり、世界中の人々が安心して暮らせる日が来ることを、心の底から祈念致しております。

上智大学中国留学生会会長　周川　清（法学部国際関係法4年在学中）
上智大学中国人留学生同窓会「華鷲会」会長　王　勝文（2011年 法学部地球環境法）

経鷲会＜今後の行事予定＞

3月25日現在、新型コロナウイルスの感染が世界的に拡大しております。亡くなられた方々のご冥福をお祈りすると同時に、感染症で苦しんでおられる方々にお見舞いを申し上げます。東京都では小池都知事から「爆発的な感染拡大の危機」として外出自粛要請が出されました。本誌が皆様のお手元に届く頃には、新薬開発と感染終息の目処が立っている事を心から願うばかりです。

今年度の多くの経鷲会主催の行事（ゴルフ懇親会、柴又見学ツアー、女子部勉強会、佐野市立吉澤記念美術館見学ツアーなど）も、残念ながら軒並み秋に延期せざるを得ず、また、5月31日（日）のASF（オールソフィアンの集い）で恒例となりましたワインを楽しむ会につきましても、3月27日に大学側の要請を受けてASFの中止が決定されましたので今年は開催出来なくなりました。

なお、11月上旬には、経鷲会総会、講演会及び懇親会をソフィアンズクラブで開催致す予定でございます。皆さまお誘い合わせの上ご参加下さいますようお願い申し上げます。改めて、今後の主行事の日程やその詳細について経鷲会メールニュースで配信致します。なお、経鷲会メールニュース配信のご登録がお済みでない方は、是非、ソフィア会ホームページのトップページ右上のリンクからご登録下さい。

経鷲会副会長　三輪一夫（1978年 経・営）

エコノミアン編集雑記

『ソフィアの鷲 その④』

お詫び：本誌前号（第57号）の上智大学経済学部長の蓬田守弘先生による貴重なご寄稿文章に添えた蓬田先生のタイトルを本学経済学部経済学科長と誤って掲載してしまいました。ここに掲載誤りを猛省し謹んでお詫び申し上げます。

さて世の中は新型コロナウィルス「COVID19」の感染拡大によって、活動にいろいろな制約が出ております。上智大学では3月に予定されていた学位授与式の式典が中止となり、卒業生のみを対象にした学部ごとの小規模な集会に変更となりました。上智大学のキャンパスを、めでたく巣立って行く希望に満ちた鷲たちやそのご家族にとっては、なんとも寂しい3月になってしまいましたが、COVID19の感染リスクとその拡大を防ぐためには残念ですが仕方ない事だと思います。

我々の大先輩たちは先の戦時中に、筆者の世代では学生紛争で、そして何より記憶に新しいのは2011年3月11日に発生した東日本大震災の影響で、上智大学の学位授与式の式典が中止になった歴史があります。

この大震災発生から今年で9年目を迎えますが、当時を思い出すと心が痛みます。当時筆者は新宿三井ビルの50階で茨城県と福島県に点在する製造拠点との電話会議中でした。会議電話のむこう側から突然ゴーともウォーとも聞こえる音がし「地震だ、デカそうだぞ！」という叫び声があがりました。ともかく会議電話は直通電話線を使っていたので「電話切るなよ！」と指示をして間もなく50階も大きく船のように揺れ始めました。緊急災害対策チームを立ち上げ茨城、福島他との連絡を保ちながら従業員とその家族の安否確認、支援物資の調達手配とロジスティックスの確保をしていたのを記憶しています。大震災による建物の倒壊、続く大津波の襲来、そして福島の原発電源喪失事故による近隣住民の緊急避難命令と続き、多くの方々の命が失われていることを、ビルのエレベーターも止まり、なすすべもなくテレビ画面を眺めていて知りました。結果として原発から2キロ圏内にあった工場二つを閉鎖せざるをえず、600人余りの従業員も離散して避難生活を送ることになりました。

気仙沼唐桑村カキ養殖場

筆者はご縁があって毎年気仙沼でカキ養殖をしている唐桑村を訪問し、被災された方々のお話を伺っています。当時、被災された方々は子供さんたちの卒業式どころではなく、現在に至るまで多くの苦しみや悲しみを乗り越えて、復興に向けた挑戦の長い道のりを歩まれています。改めてこの時期にこそ、東北大震災で被災された方々に思いを寄せ、1日も早く真の復興が実現されるようお祈りするばかりです。

戸川　清（1971年 経・経）